『高光集』再考

牛山睦子

一　はじめに

藤原高光の家集『高光集』は、不詳部分が多く残された家集である。高光の出家を贈答歌で描いた『多武峯少将物語』に比べ、『高光集』の配列・構成、編集等について再考し、和歌を詳解、考察する。また、諸資料を精査し、高光の経歴や、村上天皇をはじめ、高光を取り巻く人々との関係性、『多武峯少将物語』との関連等について検討する。これらを考察、検討することによって、家集において高光をどのような人物として造形しようとしたのかを考えたい。

二　藤原高光の経歴

藤原高光は、天慶二年（九三九）に生まれ、正暦五年（九九四）に没した[1]。多武峯少将と号し、法名は如覚。北家藤原氏右大臣師輔八男で、母は醍醐天皇皇女雅子内親王、安子・伊尹・兼通・兼家らの異母弟である。天暦二年（九四八）に童殿上、天暦九年（九五五）一七歳で従五位下（以下、位階は『三十六人歌仙伝』に拠る）。侍従、左衛門佐を経て、天徳四年（九六〇）に右近衛少将となる。天徳五年（応和元、九六一）正月、一三歳で従五位上に叙されるが、同年一二月五日に比叡山横川で出家を遂げる。翌年の夏には多武峰に移った。歌人としては三十六歌仙の一人で、『拾遺集』以下の勅撰集に二三首入集する[2]。

経歴を兄弟と比較すると、異母兄伊尹は天慶四年一八歳で従五位下、天暦二年二五歳で従五位上となる（『尊卑分脈』）。同母弟為光は天暦一一年一六歳で従五位下、応和二年二一歳で従五位上となる（『公卿補任』）。為光の昇進がやや速いが、高光の昇進も摂関家の子息としては順風と言えよう。

高光の歌歴・詠歌を見ると、伝存する歌数は約六〇首。『多武峯少将物語』に一八首、本稿が底本とした、冷泉家時雨亭文庫蔵高光集唐草装飾本（以下、唐草本と略称、後述）に三四首あるのがその大方である。両書間に重複歌はない。新田孝子は、「『高光集』

は、高光の詠歌をすべて収録したものではないであろう[3]」とする。ただ、高光詠三四首のうち半数の一七首が勅撰集に入集しており、勅撰集の撰歌資料に用いられる。

唐草本に見えず、『拾遺抄』・『拾遺集』に採られるのが、次の一首である。

さくなんさ　如覚法師

むらさきの色にはさくなむさしのの花のゆかりと人もこそ見れ

（拾遺抄・雑上・四八二／拾遺集・物名・三六〇）

この他にも、出典不詳歌が四首、勅撰集に入集する。『新古今集』雑下・一七一九、『続古今集』恋二・一一二三、『新拾遺集』雑中・一八一六、『新後拾遺集』雑下・一三六六である。これらから、唐草本や『多武峯少将物語』以外の資料の存在が浮上する。しかし、歌人高光に関する資料は僅かである。父師輔主催の「天暦十年八月十一日坊城右大臣師輔前栽合[4]」に「侍従君」とあるのが初見か。一八歳の詠として、唐草本八番歌に「歌合に」の詞書で載り、『新千載集』慶賀・二三二四に「題知らず」として入集する。

左　月　侍従君

よろづよのまつにかかれるあきの月ひさしきかげをみよとなるべし

（坊城右大臣殿歌合〈陽明文庫蔵本〉・一）

村上天皇主催の「天徳四年三月卅日内裏歌合[5]」に右方人として参加。同じ方人には異母兄の兼家、唐草本中に登場する藤原清遠・藤原朝光の名も見え、歌合の「仮名日記甲」（尊経閣文庫蔵十巻本[6]）には、後宴で二二歳の高光が「歌うたひにさぶらふ」姿が描かれる。

『安法法師集』四九番詞書「ひごの少将、あふぎに大井河にむまひやしたるかたかきてよませ給へる」の「ひごの少将」は「備後の少将[7]」として、天徳五年正月に備後権介となった高光を指すと考えられる。さらに、『続後拾遺集』雑上・一〇四五・安法法師歌は、詞書に「少将高光かしらおろして多武峰に侍りけるに、神無月の比申しつかはしける[8]」とあり、「今はとて世をのがれけん程よりも思ひこそやれ木の葉ちる比」の詠は、唐草本一番歌「かみなづき風にもみぢのちる時はそこはかとなくものぞかなしき」を踏まえたものであろう。ただ、安法法師と高光との具体的な交流は判明しない。

「天徳四年三月卅日内裏歌合」の翌年、応和元年一二月五日に、高光は妻子を残して出家した。その唐突さは、『村上天皇御記』応和元年一一月二三日条に「此日春日祭使右少将高光参入[9]」と、直前まで春日祭使を勤仕していたことからも明らかである。出家については、『多武峰略記』応和元年一二月五日条に「詣叡山横川。礼増賀上人出家受戒[10]」と記され、『村上天皇御記』応和元年一二月六日条は「伝聞。右近少将高光。昨日到横川寺出家之由[11]」と時日を裏付ける。翌年、比叡山から多武峰へ移ったことは、『多武峰略記』応和二年八月条に「登多武峰修常行三昧」とある[12]。

高光の出家と親族の悲嘆を描いた『多武峯少将物語』は、出家の翌年、多武峰に移る前の応和二年夏頃までの成立とされる。作者を、玉井幸助は高光室に近侍していた乳母[13]、笹川博司は高光室や同母妹愛宮に近侍した人物[14]と推定する。読者には、師輔没後の九条流の人々、とりわけ中宮安子に献上されたとして、安子を第

一の読者と想定する門澤功成の指摘がある。[15] 本稿では、『多武峯少将物語』の成立・編者・読者について、これらの指摘に同意する。

『多武峯少将物語』冒頭は、「本よりかかる御心ありけれど、父おとどおはしけるほどは制しきこえ給ひければ、えおぼしたざりけれど[16]」と、出家への意思はもとより堅固であったが、父に制止され思い止まっていたと高光の心情を描く。しかし、意思を固めた経緯は記されず、それが不分明であるからこそ、『栄花物語』の安子崩御を理由とする出家譚や、『大鏡』、『古本説話集』の逸話、『新古今集』の村上天皇と高光の贈答[17]が生成されたのであろう。

三　底本及び先行研究

伝本は、四三首まで歌序がすべて同一である。本稿では、歌数により、四三首本を「基幹本」、四三首本に増補歌を加えた本を「増補本」と大別し[18]、次の七本を参看した。

〔基幹本〕

1　冷泉家時雨亭文庫蔵唐草装飾本。平安時代末期書写[19]。本稿底本。

2　冷泉家時雨亭文庫蔵雲母摺本。鎌倉時代後期書写。以下、雲母摺本と略称。

3　宮内庁書陵部蔵（五一〇・一二）御所本。一九番歌が欠落した四二首本[20]。以下、御所本と略称。

4　群書類従本。文政二年（一八一九）刊。

5　彰考館本。兼盛集との合綴。一四番歌が欠落した四二首本[21]。

〔増補本〕

6　五二首本：西本願寺本。一二世紀初め書写。『多武峯少将物語』から九首増補。『新編国歌大観』及び『新編私家集大成』の底本。

7　四五首本：正保版歌仙家集本。『新古今集』から二首増補。正保四年（一六四七）刊。以下、正保版本と略称。

底本には、増補がない「基幹本」で、根幹的な形態[22]の最古写本、『冷泉家時雨亭叢書第二十巻、平安私家集　七』所収の「高光集唐草装飾本」を用いた。

該本を注釈研究上、初めて底本としたのは笹川である。それ以前は、御所本（阿部俊子）、群書類従本（玉井、新田孝子、阿部は一九番歌のみ）、正保版本（山口博）を用いており、西本願寺本を底本とした論はない。これらの考究[23]は、成立・増補を除き、相違は少ない。

西本願寺本に増補される九首は、すべて『多武峯少将物語』からの採歌である。師氏室（西本願寺本では師氏）と高光の贈答、高光室の長歌一部、中宮安子と高光の贈答、妹愛宮と高光の贈答と、主に高光と親族の女性たちとの贈答歌を出家後の交流として補充している。正保版本が増補した二首は、『新古今集』雑中・一六二七（『多武峯少将物語』三六番歌を改変）と、雑下・一七一九（村上天皇との贈答、如覚の返歌）である。『新古今集』の一七一九は、『大鏡』等からの採歌でもある。

先行研究の特徴的な論点（編者、配列・構成、出家理由）を整理

しておく。

編者には諸説があり、「明示しがたい」とする山根對助、敬語や助動詞「き」の多用等を根拠に自撰とする山口、芦田耕一も自撰説である。他撰説としては、島田良二は「高光没後まもなく第三者による編集」、阿部は「『拾遺集』の成立よりはおくれる」、新田は「時間的にも距離的にも遠い人物の手に成ったもの」、笹川も「高光の伝説化」を図った他撰とする。稿者は、後章で示す唐草本の配列・構成、編集意図等から、編者は村上天皇と高光双方に詳しい、血縁者周辺であろうと想定する。

配列は、「ほぼ年代順」とする理解が大勢であり（山根、玉井、山口、島田、新田）、笹川も「高光詠を年代順に配列しようとした意図が窺われる」と述べる。構成は、「出家」前後に分ける見方が有力である（山口、島田、阿部、新田、笹川）。また、配列に絡めた増補説がある。稿者は、年代順の配列及び増補説について疑義があり、後述する。

出家理由については多様である。「同族相互の権力争奪を嫌悪する等、本性による」（玉井）、「雅子内親王・康子内親王の薨去による」（田代愛子）、「父師輔の死に伴う複合的な要因による」（山根、芦田、新田）等で、笹川は「師輔の死後、師尹の息子二一歳の済時が二三歳の高光を追い抜いて、左近少将に任ぜられた」と昇進の停滞を重視する。

以上が主要論点である。本稿では、主に唐草本を底本とした笹川の考証を検証する。

四　配列の意図

配列を検討するために、図A（次ページ参照）に詠歌年が確定できる一五首全てを抽出し、歌番号順に並べ、年齢を記した。唐草本は、高光の一五、一六歳頃（二九番歌）から、四〇歳（三九番歌）までの詠を収めていることが分かる。配列は、二三歳時の一番歌に始まり、出家後の二四歳時に詠んだ四三番歌で終わる。一番歌と四三番歌は時間的に順列し、この二首により家集は包括される。歌は年代順に並ぶ部分と、表欄外に＊印を付けたように、年代に逆行する部分とが混在する。

図Aによると、先行研究の「ほぼ年代順」という見方や笹川の「高光詠を年代順に配列しようとした意図」という指摘に同意はできない。むしろ、出家の前後年で並ぶ歌を巻頭と巻軸に配し、巻頭では出家直前の公的な詠歌の終わりを、巻軸では出家生活の始まりを表すと読める。この配列により、家集内には年代順とは異なる時間の流れが生じ、高光の生を往還する構図が浮上してくる。これは配列上の意図的な操作であろう。

五　高光を取り巻く人々

登場する人々を概観し、高光がどのように造形されているかを考察する。人々を、高光の血縁者㋐と、それ以外㋑（便宜上Ⓐ～Ⓞを付した）に分類して示す。

㋐：村上天皇関係七名：村上天皇、母宮（高光母、雅子内親王）、北宮（高光継母、叔母、康子内親王）、中宮安子（高光異母姉）、

図A　歌番号順にみる高光の年齢
（詠歌年が確定できる高光歌一五首のみ）

歌番号	年齢	年号西暦
＊1	23	応和元961
3	17	天暦九955
8	18	天暦一〇956
10	21	天徳三959
＊12・13	19	天徳元957
14		
28	23	応和元961
＊29	15か16	天暦七953か天暦八954
30	17	天暦九955
31	22	天徳四960
35	29	康保四967
39	40	天元元978
＊41	39	貞元二977
＊43	24	応和二962

応和元961年詠の一首：1番歌へ
応和二962年詠　：43番歌へ

帥大納言女、女七宮、源忠清。

藤原氏（高光以外）一〇名：同母妹愛宮、父師輔、高光室、叔父で義父の師氏、異母兄伊尹、異母兄兼通、藤原佐理、藤原清遠、藤原朝光、朝光室。

㋑：Ⓐ一条のおとどのもとなる人、Ⓑうちとけてもあらぬ人、Ⓒかたへの人、Ⓓ備後の乳母、Ⓔ人、Ⓕまた人、Ⓖ西の御、Ⓗ人々、Ⓘ上の主たち、Ⓙ内侍、Ⓚある人の女、Ⓛ女の親、Ⓜ人、Ⓝある女、Ⓞ人。（稿者注：Ⓔ・Ⓕ・Ⓗ・Ⓘは不特定多数。Ⓜ・Ⓞは不特定の個人）。

『多武峯少将物語』では、同母妹愛宮、中宮安子を含む兄弟姉妹、亡き父師輔、叔父で義父の師氏等、高光の親族のみが登場し、贈答歌等によって高光出家の諸相が描き出される。唐草本と『多武峯少将物語』とに共通する人物は、高光室、愛宮、安子、師輔、師氏、伊尹、兼通の七名である。

唐草本では、この七名に村上天皇、母宮（雅子内親王）、北宮（康子内親王）が加わる。しかし、㋐の中に、『多武峯少将物語』に登場する同母弟（為光・尋禅）や異母兄（兼家・忠君）、「鶴の子」と詠まれた高光女は含まない。

唐草本に登場する顔ぶれは、高光の出家直後の悲嘆を親族が共有する『多武峯少将物語』の指向性とは異なっている。「出家前の高光」を描くことに比重を置いているからであろう。唐草本における出家後の親族との交流は、従兄弟源忠清（有明親王男、三九、四〇番歌）、甥藤原朝光（兼通男、四一、四二番歌）との贈答で示される。しかし、これらは出家直後ではなく、空薫物や祈祷の依頼

等の詞書から、三九、四〇歳頃の詠と推定される。

親族以外の㋑の人々も、個人は一一名、その大半は詞書等から女性と分かる。女性たちへ高光が贈った恋歌四首を検討する。

一条のおとどのもとなる人に

あきかぜにみだれてものはいはねどもはぎのした葉のいろはかはらず（一一）

うちとけてもあらぬ人を、わりなき所にひきとどめて、かくやは、とつまはじきをしかくれば、あなかま、かたへの人もきくらんとわぶるに

さもあらばあれ人のきくらんこともいさかくかぎりなくものを思ふ身は（七）

西の御のふみたてまつりたる中に、かくかきてくはへたりける

としをへておもふ心のしるべにぞそらもたよりの風はふきける（二三）

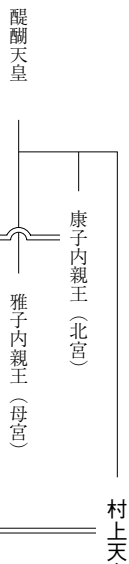
又これも同人に

かた時もわすれやはするつらかりし心のさらにたぐひなければ（二四）

二番歌は兄伊尹に仕える㋐の女性へ、「慕う気持ちは変わっていない」と訴え、七番歌では「心を許してくれない」㋑の女性に対して、「人聞きなどどうでもいい。こんなにもの思いしているのだから」と強く迫る。㋒の「西の御」という宮仕え女房へは二首、そのうち二四番歌では「片時も忘れるものか。辛い仕打ちをされても」と詠む。これら四首のいずれの歌に対しても、女性からの返歌はない。二番歌の「いろはかはらず」や二三番歌の「としをへて」の歌句は、女性たちと高光との交情の時間を伝え、女性たちと親昵する歌を散在させることによって、若き色好みの一面が現れる。これら四首からは、摂関家の貴公子が無常感に浸り、憂愁を抱いて出家に至るというような経緯は見えてこない。

六　村上天皇と高光

図B　略系図（単線は親子関係。二重線は婚姻関係）



図Bの略系図に見るように、村上天皇と高光とは叔父と甥の血縁であり、義理の兄弟にもなった。両者の初対面は高光一〇歳の童殿上の折で、『九暦抄』天暦二年八月一九日条「高光依召候御前。随仰暗誦文選三都賦序。帝感歎云云」[24]は、高光が天皇の御前で『文選』「三都賦序」を暗誦、叡感にあずかったことを伝える。

唐草本に村上天皇の御製はないが、一・一〇・三五番歌の詞書

に登場する。これら三首は高光の才に特別な意味を付与し、唐草本の力点となっている。以下、各歌の特徴的な詞書や語句には私に傍線を付し、校異・他出は特に重要な箇所のみ摘記した。

（1）高光の文才

十月九日、冷泉院のつり殿にて、神な月といふ心をかみにおきてよませ給ひしに

かみなづき風にもみぢのちる時はそこはかとなくものぞかなしき（一）

勅題の「神な月といふ心をかみにおきて」に対し、高光自身の情感とともに、冬の初めの一般的な感情をも掬い上げてみせた歌である。『日本紀略』天徳四年九月二三日条に「今夜亥三剋内裏焼亡」と内裏の火災が記され、村上天皇はその後約一年間、冷泉院に遷り住んだ。同書天徳四年一一月四日条に「天皇自職曹司遷御冷泉院」、応和元年一一月二〇日条に「今日亥二点、天皇自冷泉院遷御新造内裏」[25]と見える。この記録によれば巻頭歌は、天皇が新造内裏に遷るひと月程前の、応和元年一〇月九日の詠となる。つまり、出家直前の歌を巻頭に置いたのである。

唐草本以前に、天皇の命を受けて歌を奉る例は、『貫之集』（陽明文庫蔵本）八一九に見出すことができる。『古今和歌集』撰集に関する詞書だが、醍醐天皇の貫之への信頼、信任が伝わる。

延喜御時やまとうたしれる人をめして、むかし今の人のうたたてまつらせ給ひしに、承香殿のひんがしなる所にて歌えらせ給ふ、よの更くるまでとかういふほどに、仁寿殿のもとの桜の木に時鳥のなくをきこしめして、四月六日のよなりければめづらしがりをかしがらせ給ひて、めし出でてよませ給ふにたてまつる

ことなつはいかがなきけん時鳥こよひばかりはあらじとぞきく（八一九）

平安期の私家集の巻頭は、春の歌が約五割を占める[26]。『能宣集』巻頭は春の詠であり、詞書中に「円融太上法皇の在位のすゑに、勅ありて家集をめす、今上花山聖代、また勅ありておなじき集をめす」と、円融、花山両天皇から家集を召された栄誉を記す。

唐草本において「かみなづき」の歌を巻頭に配する理由は、出家前の高光を村上天皇の勅題に応えた歌才ある人物として晴の場に据え、出家へと転ずる生の明暗を分かつためではないか。

天暦三年三月つごもりの日、また人めして、花も鳥も春をおくりすといふ心ある詩つくらせ給ふに、やがてやまとうたひとつそへてたてまつれ、とおほせごとあるに

さく花ののどけき春のあめにこそふかきにほひもあらはれにけれ（一〇）

「天暦三年三月つごもりの日」の詞書には、疑義がある。『村上天皇御記』天暦三年三月三〇日条に「此日於蔵人所有尚書竟宴」、『九暦抄』にも同年同日「蔵人所尚書竟宴事」と記され、「尚書竟宴」が催された事実は確認できる[27]。ただ、この年高光は一一歳であり、歌を詠んだ記録はない。青木賜鶴子が「天暦三年（九四九）尚書竟宴の折に出詠するなど歌才を発揮した[28]」と記すのは、この詞書に拠るのであろう。

伝本中、彰考館本（兼盛集との合綴本）のみが「天とく三年」と

記す。「天とく三年」であれば、『日本紀略』天徳三年三月三〇日条に「召文人於秘書閣。令賦春被鶯花送之詩」と、村上天皇が文人たちを召して、春が鶯や花に送別されるとの題意の詩を作らせた記録がある。[29] 従って、一〇番歌の詞書は「天徳」を「天暦」に誤記した可能性がある。さらに、「また人」を「文人」とする伝本（御所本・群書類従本・正保版本）があり、「文」を「又」と誤写し、さらに平仮名に記したかと考えられる。「天徳三年」に、二一歳の高光が文人として認知され、村上天皇に召し出された晴の場での詠が一〇番歌と推断したい。

（2）出家への導因

村上の帝かくれさせたまへるころ、月を見て

かくばかりへがたくみゆる世の中にうらやましくもすめる月かな（三五）

三五番歌の他出は多く、『拾遺抄』、『拾遺集』の他に、『金玉集』雑・六一（初句「しばしだに」）、『三十六人撰』七五、『和漢朗詠集』述懐・七六五、『栄花物語』「月の宴」高光出家譚等に見える。先ず、唐草本と『拾遺抄』、『拾遺集』とを比較する。

法師にならんとおもひ侍りけるころ、月を見侍りて　少将高光

かくばかりへがたく見ゆるよの中にうらやましくもすめるつきかな　（拾遺抄・雑下・五〇〇）

法師にならんと思ひたち侍りけるころ、月を見侍りて　藤原たかみつ

かくばかりへがたく見ゆる世の中にうら山しくもすめる月かな　（拾遺集・雑上・四三五）

『拾遺抄』・『拾遺集』詞書はともに、出家へ向かう歌とする。笹川も、公任が高光の孫娘婿であるため、『拾遺抄』の詞書は信頼できるとし、三五番歌を出家直前の詠に位置づける。[30] しかし、稿者は、唐草本が根幹形態を留めていることを考慮し、出家後の高光が村上天皇の崩御を哀悼した詠と捉える。天皇も人の世の定めの内にあり、天上の月だけが、死すべき人の世を澄んだ光で照らし出していると、御代の終焉を悼み、かつ遁世した自身も、死すべき運命からは逃れられないという思いを籠めた歌と解読する。

図Cは、村上天皇の関わる歌を中心に、天皇の異母姉でもある二人の母の死、父の死、崩御以降の歌をまとめ、五、六、三四番歌の詞書を付した表である。この表には着目すべきことが二つある。一つは、三五番歌に村上天皇の御代の公私にわたる高光と、村上天皇崩御時の出家後の高光との二つのイメージを、同時に重ね合わせることを試みていることである。つまり、唐草本の四三首を、高光の出家の話題で二分割するのではなく、二つのイメージを重ねることによって、出家前後の時間を繋ぐのである。

もう一つは、天皇や父母を配して高光の出自を示し、その上で、歌の配列によって出家へと傾倒する心情を表すことである。三番歌の詞書で母雅子内親王の死が示され、さらに五・六番歌の詞書で、母の死が出家への最初の契機であったように読ませる。実際には、五・六番歌の詠歌年は不明で、母の死が契機となったかは断言できない。しかし、母の死を出家を願う心情に密着させ、母亡き後の、継母で叔母の康子内親王の死や葬送の歌が具体的であ

図C　数字は歌番号。歌中人物。括弧内は詞書等。

1　村上天皇
3　母、雅子内親王薨去の翌年（母宮うせ給ひてのち、としかへりて、あめふる日、ひめ君にきこえし）
5（世の中、はかなくのみおぼゆるころ、ゆきのふる日）
6（出家せむとおもふころ、たたむがみにかきつけける）
10　村上天皇
12・13　叔母で継母、康子内親王の薨去と葬送。12（北宮かくれたまへるころ）・13（御さうそうに）
31　父、藤原師輔の薨去後（おとどうせ給ひてのち、新嘗會のころ、服にて内へもえまゐらで、内侍のもとに）
34（世の中はかなくのみおもほえて、法師になりなむとおもふころ）
35　村上天皇崩御（村上の帝かくれさせたまへるころ、月を見て）於：多武峰
36～42　於：多武峰（37は推定）
43　於：比叡山（出家直後）

るのも、こうした心情の反映であろう。父師輔の死は三一番歌の詞書に示されるのみで、哀傷歌はない。が、三四番歌の詞書で「世の中はかなくのみおもほえて、法師になりなむとおもふころ」と、父の死をも出家の決意に結び付け、最終的に、村上天皇崩御を出家要因に位置付けるのである。崩御は康保四年（九六七）五月二五日のことで、高光の出家からは五年半も経過しており、理由とはなり得ない。しかし、唐草本は、父母や村上天皇の死を年次順に並べ[31]、近親者の死を出家へ向かう高光の心理に結びつける。

ここで造形しようとするのは、専ら出家へと誘引される高光の姿である。『多武峯少将物語』に描かれなかった出家要因に焦点を当て、出家へ向かう高光の心境を明らかにすることを企図する。また、出家後の贈答歌には、『多武峯少将物語』には登場しない、従兄弟源忠清、甥藤原朝光等の顔ぶれを配し、交流を新たに補填する。つまり、『多武峯少将物語』の読者であった親族や出家を知る者たちが抱く疑問、「高光の出家理由」への興味・関心に応えるべく編集された家集と考えられるのではないだろうか。

七　巻軸歌の意味

巻軸の四三番歌は、出家の翌年、叡山で詠んだ歌である。

ひえの山に住み侍りけるころ、人のたきものをこひて侍りければ、梅花の枝にわづかにちりのこりて侍りけるにつけて、つかはすとて

春すぎてちりはてにけりむめの花ただかばかりぞえだにのこれる（四三）

高光が所望された薫物は、梅の香に似た練り香であろう。上の句の「春すぎてちりはてにけりむめの花」は唐草本の独自表現。ただ、初句の「春過ぎて」は、

さくらのはえたるえだのあかきにつけて

はるすぎてあきはまだこぬほどなればはなかもみぢかえこそ

さだめね　（中務集〈西本願寺本〉・一五五）

のように、専ら季節が変わることを表すので違和感を覚える。

他本は「春たちて」（雲母摺本・御所本・西本願寺本）、「春立て」（群書類従本・正保版本〈「立」の傍記に「過」〉）とする。この「春立ちて」でも、「立春になって梅の花がすっかり散ってしまった」となり、調和しない。「春立ちて」「ちりはてる」「梅」の語句が揃う歌は見当たらない。「たつ」には、『源氏物語』「紅葉賀」の「つれなくて立ちぬ」[32]のように、「時が経過する」意の用法もある。しかし、和歌における「春たつ」は、

平仲和歌合初春

春たちてなほふる雪はむめの花咲くほどもなくちるかとぞおもふ　（躬恒集〈書陵部蔵御所本〉・一六〇）

のように、「立春」の意であり、「春経つ」の意で用いられた歌は見出せない。『小大君集』三六が初句を「春風に」、源氏注の『河海抄』「梅枝」所引の一五四九番歌が『高光日記』を出典として「春過てちり残りける」とするのは、歌意による校訂であろう。[33]

竹鼻績は「むめの花ただかばかり」について、『源氏物語』「梅枝」の「ちりすきたるむめのえたにつけたる御文」に当該歌を意識した趣向を認め、また『源氏物語』「真木柱」の帝の歌の「梅の花ただかばかり」とある表現も「遡源すれば如覚法師の歌にゆきつく」等、高光出家への関心から、和歌が享受されたことを指摘する。[34]

先行研究では当該歌を、『拾遺抄』〈笹川〉、『拾遺集』〈山口、島田、新田〉からの増補と見る。巻軸が出家直後の歌では、年代順の配列に反するためである。

比叡の山にすみ侍りけるころ、人のたきものをこひて侍りければ、侍りけるままにすこしを梅の花のちりのこりたるえだにつけてつかはすとて

如覚法師

はるたちてちりはてにけりむめのはなただかばかりぞえだにのこれる　（拾遺抄〈島根大学図書館本〉・雑上・四〇四）

ひえの山にすみ侍りけるころ、人のたき物をこひて侍りければ、侍りけるままにすこしを梅の花のわづかにちりのこりて侍るえだにつけてつかはしける

如覚法師

春すぎてちりはてにける梅の花ただかばかりぞ枝にのこれる　（拾遺集・雑春・一〇六三）

山口・島田はともに『拾遺集』との詞書等の酷似を理由に『拾遺抄』によって唐草本が増補されたと見る。[35]笹川はまた、『拾遺抄』の初句が「はるたちて」なので、「はるたちて」が「春過ぎて」より「古い本文であったらしい」が「何らかの本文に混乱があった」とする。[36]笹川が使用した『拾遺抄』は島根大学図書館本（流布本系統）[37]だが、宮内庁書陵部本（四〇五・一一一）『拾遺抄』（異本A系統）に当該歌はない。静嘉堂文庫所蔵貞和三年奥書本『拾遺抄』（異本B系統）では、「はるたちて」に「スキテ」、「ちりのこりたる」に「ハテニケル（朱）」と、傍線部に片仮名の傍記（朱）が付されており、直ちに「春たちて」を古い本文であるとは決しがたい。

『拾遺抄』・『拾遺集』と唐草本との関係を見ると、『拾遺抄』・『拾遺集』に採られた高光歌は四首あり、唐草本にはない一首（既述、詞書「さくなんさ」）を含む。『拾遺抄』・『拾遺集』との相違は、唐草本五番歌、三五番歌（既述）の詞書に顕著である。唐草本五番歌は、「世の中、はかなくのみおぼゆるころ、ゆきのふる日」であるが、『拾遺抄』雑上・四二九、『拾遺集』哀傷・一三三二では、それぞれ「法師に成りはべらんとしけるころ」、「法師にならんとしけるころ」と近似する。しかし、唐草本の意味とは異なる。結局、詞書が類似するのは四三番歌のみとなるが、この一首の詞書の類似を理由として、増補と判断するのは難しい。

唐草本四三番歌に詠まれた、わずかに枝に残った梅の花と香とは、高光の俗世への思いを残り香に喩えるかのようであり、「かばかり（香ばかり・これだけ）」と悟った果ての詠と読める。この歌を巻軸に置くことで、高光の出家者としての自覚を定かにするのではないだろうか。

先の「四　配列の意図」において唐草本の配列の吟味をし、高光歌は年代順に配列されたとは言い難く、配列には操作が見えると指摘した。このことや歌意の検討を踏まえ、総合的に判断すると、四三番歌を増補とする決め手はなく、編まれた当初から巻軸に配された可能性もあると考えられる。

八　結びに

配列・構成、編集等について再考するため、諸資料を精査し、高光の経歴、村上天皇をはじめ高光を取り巻く人々との関係性、『多武峯少将物語』との関連について検討した。

唐草本は、必ずしも年代順に配列された家集ではない。出家直前の歌と、出家生活の始発を示す歌とを、それぞれ巻頭と巻軸に配したと考えられる。

村上天皇崩御の詞書を付す三五番歌に二つのイメージを重ね、一番歌から三五番歌までは出家前の高光に比重を置き、三五番歌から四三番歌までを出家後の交流の一端を表すものとして後半に添える。配列・構成や歌意の検討、『拾遺抄』・『拾遺集』との関係性を考察することにより、四三番歌は増補されたものではなく、むしろ成立当初から巻軸に据えられた歌ではないかとする。

唐草本は、村上天皇の血脈に繋がる高光の才能や交流等を映し出すが、その高光の姿は、父母の死や出家事跡に添いつつも、和歌の配列・構成によって造形されたものである。『多武峯少将物語』では描かれなかった出家の要因を探り、出家へと向かう心境を明らかにしようと、血縁者周辺が編んだものであろう。『多武峯少将物語』の読者や、出家の事実のみを知る者たちに向けて、高光の出家前後の姿を留め、出家要因への疑問、興味・関心に応えるために編まれた家集と想定する。なお、成立・編者については、さらに検討の必要があり、今後の課題としたい。

注（1）　没年は『多武峰略記』「正暦五年三月十日。沐浴浄衣。端座合掌。向西方唱弥陀宝号。書偈曰。比来修行念仏業。常願西方極楽界。臨終夕初見三聖。賢愚莫疑浄土教矣。投筆遷化」に拠る（『群書類従』第二十四輯釈家部、Japan Knowledge Lib）。他の没年説に、『斎宮女御集』七二番歌詞書「みねの君うせてのころ」、一三一〇番歌詞書

「たうのみねの君なくなり給へるころ」を根拠とする、寛和元年（九八五）以前とするものがある。

（2）勅撰集入集二三首の内訳（括弧内は唐草本の歌番号。無は、唐草本からの入集なし。47は西本願寺本の歌番号）。『拾遺集』四首（5、35、43）、『新古今集』六首（1、2、23、37、47）、『新勅撰集』三首（24、31、32）、『続後撰集』一首（9）、『続古今集』二首（12）、『玉葉集』一首（3）、『続千載集』一首（30）、『続後拾遺集』二首（13、39）、『新千載集』一首（8）、『新拾遺集』一首（無）、『新後拾遺集』一首（無）。

参考：『拾遺抄』四首（5、35、43。ただし43は、島根大学図書館本、静嘉堂文庫所蔵貞和三年奥書本に拠る）。

（3）新田孝子『多武峰少将物語の様式』「第一章、第四節『高光集』との契縁」（風間書房一九八七）。

（4）名称は『平安朝歌合大成』第一巻に拠る（萩谷朴編、同朋舎一九七九）。

（5）名称は『平安朝歌合大成』第二巻に拠る（出典、注4参照）。

（6）『歌合集』（萩谷朴・谷山茂校注、日本古典文学大系、岩波書店一九六五）。

（7）『安法法師集』四九番歌脚注（『平安私家集』所収、犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注、新日本古典文学大系、岩波書店一九九四）。

（8）『安法法師集』六六番歌詞書は、「入道少将の御もとにいひやりける」とある（出典、注7参照）。

（9）『村上天皇御記』「応和元年十一月廿三日癸未。此日春日祭使右少将高光参入」（『三代御記逸文集成』古代史料叢書第三輯、国書刊行会一九八二）。

（10）『多武峰略記』「応和元年十二月五日詣叡山横川。礼増賀上人出家受戒。同二年八月登多武峰修常行三昧」（出典、注1参照）。なお、平林盛得は、「増賀上人」ではなく「良源」と比定した（『国文学言語と文芸』大修館書店一九六三・九）。

（11）出典、注9参照。

（12）出典、注1参照。

（13）玉井幸助『多武峯少将物語』附録「三　成立と作者」（塙書房一九六〇）。成立も同。

（14）笹川博司『多武峯少将物語』解説（『和歌文学大辞典』日本文学Web図書館）。

（15）門澤功成「『多武峯少将物語』の成立基盤と読者―あい宮の担う師輔没後の閉塞感を基点として―」（『中古文学』第七八号、中古文学会二〇〇六・一二）。

（16）『多武峯少将物語本文及び総索引』「一　少将出家」（小久保崇明編、笠間書院一九七二）。

（17）『栄花物語上』「月の宴」（松村博司・山中裕校注、日本古典文学大系、岩波書店一九六四）。『大鏡』中「一　右大臣師輔」（松村博司校注、日本古典文学大系、岩波書店一九六〇）。『古本説話集』「高光少將事第三十」（『梅沢本古本説話集』川口久雄校訂、岩波文庫一九五五）。

『新古今集』雑下・一七一八、一七一九。

少将高光、横河にのぼりて、かしらおろし侍りにけるを、きかせ給ひてつかはしける　天暦御歌

都より雲の八重たつおく山の横河の水はすみよかるらむ（一七一八）

御返し　如覚

百城の内のみつねに恋しくて雲の八重たつ山はすみうし（一七一九）

（18）伝本のまとめには、次のⅠ～Ⅲを参考にした。Ⅰ笹川博司『高光集』解説（『和歌文学大辞典』日本文学Web図書館）。Ⅱ芦田耕一『高光集』解題（『新編国歌大観』日本文学Web図書館）。Ⅲ小林一彦『高光集雲母摺本』解題（『冷泉家時雨亭叢書第九十一巻、平安私家集十三　擬定家本私家集続々』朝日新聞社二〇一五）。

（19）『冷泉家時雨亭叢書第二十巻、平安私家集　七』所収「高光集唐草装飾本」影印（朝日新聞社一九九九）。

(20) 小林一彦『高光集雲母摺本』解題では、「御所本は『冷泉家時雨亭文庫蔵雲母摺本』を転写した本」とする（出典、注18Ⅲ参照）。

(21) 彰考館蔵兼盛集合綴本（巳八―〇七〇五〇）。マイクロフィルムと紙焼本が、国文学研究資料館にある。

(22) 新藤協三「高光・たかみつ」解題（『新編補遺）に拠る（『新編私家集大成』日本文学 Web 図書館）。

(23) 主な先行研究①～⑨と主な底本。
①山根對助「藤原高光の出家」（『国語国文研究』第九号、北海道大学国語国文学会一九五六・三）。②玉井幸助「藤原高光伝」底本：群書類従本（出典、注13参照）。③山口博「藤原高光集論」底本：正保版本。（『王朝歌壇の研究　村上・冷泉・円融朝篇』桜楓社一九六七）。④島田良二「藤原高光集」（『平安前期私家集の研究』桜楓社一九六八）。⑤阿部俊子「第二章　多武峯少将物語と高光集」底本：書陵部本（御所本）＋群書類従本一九番歌（『歌物語とその周辺』風間書房一九六九）。⑥芦田耕一「『多武峯少将物語』序論」（『国文学研究ノート』創刊号、神戸大学「研究ノート」の会一九七二・一二）。「高光出家の原因をめぐって」（『平安文学研究』第五十八輯、平安文学研究会一九七七・一一）。⑦田代愛子「平安貴族のアンニュイ―藤原高光を中心として―」（『香椎潟』第二十四号、福岡女子大学国文学会一九七八・一二）。⑧新田孝子、底本：群書類従本（出典、注3参照）。⑨笹川博司『高光集と多武峯少将物語―本文・注釈・研究―』底本：唐草本（風間書房二〇〇六）。

(24) 『九暦抄』「天暦二年八月一九日、（中略）高光依召候御前、随仰暗誦文選三都賦序、帝感歎云云」（『大日本古記録九暦』所収、東京大學史料編纂所、岩波書店一九五八）。

(25) 『日本紀略』「天徳四年九月廿三日庚申。今夜亥三剋。内裏焼亡」。「天徳四年十一月四日庚子。天皇自職曹司遷御冷泉院」。「応和元年十一月廿日庚辰。（中略）今日。亥二点。天皇自冷泉院遷御新造内裏」（新訂増補完成記念版国史大系第十一巻『日本紀略後篇・百錬抄』所収、黒板勝美・国史大系編修会編輯、吉川弘文館一九六五）。

(26) 『篁集』（書陵部本）から『肥後集』（書陵部本）までの私家集。

(27) 『村上天皇御記』「天暦三年三月三十日。此日於蔵人所有尚書竟宴」（出典、注9参照）。『九暦抄』「天暦三年三月卅日、蔵人所尚書竟宴事」（出典、注24参照）。

(28) 青木賜鶴子「藤原高光」解説（『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社一九九四）。

(29) 『日本紀略』「天徳三年三月卅日乙亥。召文人於秘書閣。令賦春被鶯花送之詩。御製」（出典、注25参照）。

(30) 笹川博司「全釈Ⅰ　高光集」三五番歌評釈。「藤原公任が高光の孫婿であるという点などを考慮すると、公任撰の『拾遺抄』の詞書が最も信頼できる資料であろう」（出典、注23⑨参照）。

(31) 母雅子内親王：『一代要記』「天暦八年八月廿九日薨、四十五」（『続神道大系朝儀祭祀編　一代要記㈠』石田実洋他校注、神道大系編纂会二〇〇五）。／叔母・継母、康子内親王：『日本紀略』「天徳元年六月六日辛酉。一品康子内親王薨。六月十日乙丑。（中略）今日親王葬送也」。／父師輔：『日本紀略』「天徳四年五月四日壬寅。入道右大臣薨于九條第。年五十三」。／村上天皇：『日本紀略』「康保四年五月廿五日癸丑。（中略）巳刻天皇崩于清涼殿。春秋卌二」（『日本紀略』出典、注25参照）。

(32) 『源氏物語　二』「紅葉賀」（鈴木日出男校注担当、新日本古典文学大系、岩波書店一九九三）。

(33) 『河海抄』「梅枝」（『紫明抄・河海抄』所収、玉上琢彌編、角川書店一九六八）。
「ちりすきたるむめのえたにつけたる御文」。
高光日記云ひえの山にすみ侍けるころ人のたき物をこひて侍ければ侍けるまゝにすこし梅の花のわつかにちり残りて侍えたにつけてつかはしける
春過てちり残りける梅の花たゝかはかりそ枝にのこれる　見拾遺集

(34) 竹鼻績『拾遺抄注釈』「巻第九、補8」補説（笠間書院二〇一四）。

「『源氏物語』（真木柱）にある帝の『九重に霞へだてば梅の花ただかばかりも匂ひこじとや』という歌の『梅の花ただかばかり』という表現も遡源すれば如覚法師の歌にゆきつく」。

(35) 出典、注23③・④・⑨参照。

(36) 笹川博司「全釈Ⅰ　高光集」四三番歌評釈（出典、注23⑨参照）。

(37) 『拾遺抄』の伝本「島根大学図書館本」・「静嘉堂文庫所蔵貞和三年奥書本」及び歌番号は、片桐洋一編著『拾遺抄―校本と研究―』（大学堂書店一九七七）に拠る。

※本文引用に際し、固有名詞以外は漢数字表記を統一し、重要箇所に傍線を付した。

※『高光集』の本文は、底本（唐草本）を私に翻刻したものを用いた。表記は歴史的仮名遣いに、繰り返し記号は仮名に改め、適宜、読点と濁点を付した。特に七番歌は、他本により括弧内の語句に校訂した。しらぬ人（あらぬ人）。たへ人（かたへの人）。

※『高光集』以外の和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』に拠った。

※本稿は、和歌文学会例会（二〇一八年一一月一七日、於二松學舍大学）における口頭発表に基づいて成稿したものである。

新刊紹介

野本瑠美著

『中世百首歌の生成』

学部生のころだったか、中世和歌を学びたいなら題詠・歌合・定数歌を理解することから始めよ、と教わった記憶がある。それは、この三つの概念を起点として院政期以前の和歌とは様相を異にする作品が数多く制作されていったためだと思われる。

本書は定数歌のうち最もポピュラーな様式である百首歌のうち、院政期から中近世に至るまでの間につくられた作品について論じる。一口に百首歌といっても初期百首・組題百首・百首家集……とその形態は多様だが、本書ではそのうちの一つに絞ることなく、その多様なあり方をそれぞれに考察することによって「百首歌という詠歌形態に着目した」研究を企図している。

第一章では応制百首である久安百首を、第二章ではその作者と百首歌との関わりを論じる。第三章では寿永百首家集を奉納百首という観点から捉え直す。第四章では菅原道真仮託の私家集のうち百首形式で編纂されたものを「天神仮託百首」と呼称し、託宣百首としての側面を考察する。実践女子大学蔵『天神百詠』翻刻も付す。多面的な考察によって、中世和歌という大きな枠組みの中で百首歌という器が果たした役割について、その姿を立体的に把握することに成功している。

野本氏によれば、百首歌とは「〈心〉を表すのにふさわしい〈かたち〉を希求する」歌人たちが到達した形式なのである。

百首歌を起点とし、作者（編者）の欲求を実現する手段としての和歌のあり方を捉えた氏の考究を踏まえることで、百首歌ひいては中世和歌研究はさらに深化するに違いない。

（二〇一九年七月　若草書房　A5判　三二〇頁　本体一二〇〇〇円）〔穴井　潤〕